

協会設立 1 周年記念  
市民海外親善使節団報告書

1991年10月25日～11月4日



Takamatsu International Association  
財団法人 高松市国際交流協会

# 市民レベルの国際交流

財団法人高松市国際交流協会

理事長 三 野 博

近年、「国際化」は時代の潮流と言われ、大都市に限らず地方都市におきましても、国際交流の推進を求める声が増し強くなっておりませんが、その基本となるものは、一人一人の市民同士の交流であると存じます。

財団法人高松市国際交流協会は、高松市における地域に根ざした市民レベルの国際交流を進めることを趣旨として、1990年8月に設立されましたが、このたび協会設立1周年記念事業として、姉妹都市のフランス・トゥール市をはじめ、パリ、ベルリンに市民海外親善使節団を派遣いたしましたところです。団員には、日頃から国際交流活動に取り組んでいる団体などから推薦をいただき役員や会員の皆さんに御参加いただきました。使節団は、現地において温かい歓迎を受け、市民等との親善交流や視察見学を通じて、訪問国への理解を深め、また団員それぞれの立場から国際交流の重要性を再認識するとともに、トゥール市との友好親善に大きな成果をあげることができたものと存じます。

今回の派遣を通じて結ばれたトゥール市の市民等との友好関係を今後ますます発展させるとともに、団員相互の交流を深め、高松市の国際交流の推進に役立てていただきますことを希望してやみません。

最後に、市民海外親善使節団派遣事業の実施に際し、格別の御協力を賜りました高松市およびトゥール市をはじめ団員推薦団体、その他多くの関係者の皆様に対しまして、深く感謝を申しあげます。

1992年1月 日

# 目

# 次

1	市民海外親善使節団名簿	1
2	派遣日程	2
3	脇 信 男・高松市長メッセージ	4
4	トータル市での活動状況	5
5	トータル市の新聞記事	8
6	所感集	11

# 1. 市民海外親善使節団名簿

(団員50音順)

団 長	檉 村 エ ミ	(女)	財団法人高松市国際交流協会理事
団 員	穴 吹 ヤ エ	(女)	川岡婦人会書記
〃	岡 田 元 一	(男)	高松商工会議所総務部次長
〃	川 井 浩 三	(男)	高松ライオンズクラブ幹事
〃	佐 藤 理 恵	(女)	香川EC協会会員
〃	高 橋 勝 子	(女)	仏生山国際交流会マネージャー
〃	竹 田 靖 子	(女)	仏生山国際交流会会員
〃	谷 川 和 子	(女)	ドーナツ会会員
〃	田 村 日出男	(男)	高松ロータリークラブ国際奉仕委員長
〃	平 井 隆 信	(男)	香川日独協会会員
〃	古 川 新 二	(男)	高松中央商店街振興組合連合会理事
〃	古 川 由 恵	(女)	高松ユネスコクラブ会員
〃	山 田 忠 慶	(男)	古高松地区連合自治会長
事務局	藤 本 良志美	(女)	財団法人高松市国際交流協会事務局員
〃	三 好 健	(男)	財団法人高松市国際交流協会事務局員



## 2. 派遣日程

目次	月 日	地 名	時 間	交通機関	日 程
1	10/25 (金)	高松発 大阪着 大阪発	15:20 16:05 18:30	ANK-472 AF-273	高松→大阪 大阪→パリ(成田、アンカレッジ経由) (機中泊)
2	10/26 (土)	パリ着 パ リ	5:55	専用バス	パリ視察見学 凱旋門、シャンゼリゼー通り、カプシーヌ通り オペラ座、ノートルダム寺院 (パリ泊)
3	10/27 (日)	パ リ  パリ発 トゥー ル着	15:25 16:31	専用バス  TGV、在来線	パリ視察見学 オルセー美術館、ルーブル美術館、モンパルナ ス地区 着後、ホテルへ (トゥール泊)
4	10/28 (月)	トゥール		専用バス	トゥール市役所表敬訪問および視察見学 トゥーレーヌ・フランス語学院、トゥーレーヌ 甲南学園、ランジュ城、コロール人形製作工場、 ワイン・カーヴ (トゥール泊)
5	10/29 (火)	トゥール		専用バス	トゥーレーヌ仏日協会表敬訪問および視察見学 老人ホーム「グーデンベルク」、トゥール美術 館、コンパニョナージュ博物館、ヴェー・トゥ ール (トゥール泊)
6	10/30	トゥール		専用バス	ロワール河沿いの古城巡り

	(水)	パリ発 ベルリン着	17:25 19:05	AF-794	シャンボール城、シュノンソー城  着後、ホテルへ  (ベルリン泊)
7	10/31 (木)	ベルリン		専用バス	ベルリン視察見学 ブランデンブルグ門、市庁舎、ベルリンの壁 ペルガモン博物館、国際会議センター、オリンピックスタジアム、シャイロッテンブルグ宮殿 ナチ秘密警察記念館  (ベルリン泊)
8	11/1 (金)	ポツダム  ベルリン		専用バス	ポツダム視察見学 サンスーシ宮殿、ツェツィーリーエンホーフ宮殿 (ポツダム会談会場)  ベルリン視察見学 連邦議事堂、日独センター、ベルリンフィルハーモニー  (ベルリン泊)
9	11/2 (土)	ベルリン発 パリ着	9:50 11:35	AF-791	着後、パリ視察見学 ポンピドーセンター、デファンス地区 (パリ泊)
10	11/3 (日)	パリ パリ発	15:00	AF-276	パリ視察見学 エッフェル塔、ハイヘイ寺院 パリ→成田  (機中泊)
11	11/4 (月)	成田着 羽田発 高松着	10:55 16:20 17:40	ANA-637	着後、専用バスで羽田へ

ANK エアニッポン    AF エールフランス    ANA 全日空

### 3. 脇 信男・高松市長メッセージ

1991年10月25日

トゥール市長

ジャン・ロワイエ 殿

あなたにはますます御健勝のことと存じます。

高松市では、日増しに秋の気配が濃くなって来ておりますが、そちらはいかがでしょう。

さて、このたび財団法人高松市国際交流協会が派遣します市民海外親善使節団一行15人が、10月27日から10月30日までの日程で貴市を訪問いたします。この使節団の受入れにつきまして、格別の御尽力を賜っておりますこと、心から厚くお礼申し上げます。使節団は、本市の市民等により構成されており、貴市の各界の方々とお会いするほか、各地の視察見学を行い、貴市への理解を深めることを目的としております。

両市の交流は、行政レベルにとどまらず、市民同士の交流が図られることが重要であり、その意味におきまして、今回の使節団の訪問は非常に意義深いものと存じております。使節団の貴市滞在中は、格別の御高配を賜りますようよろしくお願いを申し上げます。

末筆ながら、あなたのますますの御活躍とトゥール市の尚一層の御繁栄をお祈り申し上げます。

高松市長 脇 信 男

## 4. トゥール市での活動状況

10月28日(月)

### ○トゥーレーヌ・フランス語学院訪問

ブリジッド・アダムス事務局長らから学院の概要についてスライド写真による説明を受けた後、図書資料室や授業風景などを見学した。



学院内を案内するアダムス事務局長  
(中央)

### ○トゥール市役所表敬訪問

クリスチャンヌ・バイヨー国際交流担当助役に面会し、脇信男 高松市長からジャン・ロワイエ トゥール市長宛でのメッセージを伝達した。バイヨー助役からトゥール市の都市計画等について模型による説明を受けた後、市議会議場をはじめとする庁舎内施設を見学した。また、ワインによる歓迎を受けた。



挨拶する樫村団長(左から2人目)  
とバイヨー助役(同3人目)

### ○トゥーレーヌ甲南学園訪問

猪熊真校長から学園の設立経緯や概要について説明を受けた後、学園内を見学した。また、高松市出身の生徒2名に面会した。

### ○ランジェ城見学



### ○コロール人形製作工場見学

トゥールレーヌ地方の伝統的人形であるコロール人形の製作工場を訪問し、人形製作の詳細な工程を見学した。

### ○ワイン・カーヴ見学

トゥール市に隣接するヴヴレ市の市長所有のワイン・カーヴを見学するとともに、芳醇な味わいのヴヴレ・ワインを試飲した。

10月29日（火）

### ○老人ホーム「ゲーデンベルグ」訪問

トゥール市福祉厚生担当助役クロード・クルボア氏から市の福祉厚生施策、老人ホームの概要について説明を受けた後、活発な質疑応答に引き続き、ホーム内を見学した。



説明するクロード助役

（後列、右から3人目）

### ○トゥール美術館見学

ニクール主任学芸員らから館内を巡回しながら中世の宗教画をはじめとする展示物について説明を受けた。

### ○コンパニョナージュ博物館見学

プリウ氏から博物館の建設経緯のほかフランス職人の技術の結晶である展示物について説明を受けた。

○ ヴュー・トゥール(歴史的建造物保存地区)散策  
トゥール市の観光資源であるビュー・トゥールを散策。その美しさに団員から感嘆の声があがった。



ビュー・トゥール

○ トゥーレーヌ仏日協会表敬訪問

ルセット・ツルパン会長をはじめ多数の会員や関係者が使節団を歓迎。民族舞踊の披露を織り混ぜたカクテル・パーティーに引き続き、夕食会にも招待され親しく懇談した。



使節団を歓迎するツルパン会長

(中央右から2人目)

10月30日(水)

○ ロワール河沿いの古城巡り

華麗で優美な佇まいのシャンボール城と絶世の美女ティアヌの住んだシュノンソー城を見学した。



シャンボール城



シュノンソー城

## 5. トゥール市の新聞記事

LA NOVELLE REPUBLIQUE DU CENTRE-OUEST

(中・西部フランス共和国新聞)

1991年10月29日、火曜日

### 新聞掲載記事翻訳

市民生活欄

《トゥール市を訪問中の高松市市民団体》

1988年からトゥール市と姉妹都市提携をしている日本国高松市の、市民団体を代表する15名のメンバーで構成される使節団が日曜日の夜トゥール市に到着、トゥール地方には4日間滞在の予定。

国際交流担当助役バイヨー女史が、月曜日の午前中この使節団を市役所の模型のある部屋に受け入れた。バイヨー助役は、いつもと同じように高松市役所の代表者だけで構成された使節団ではなく、今回は市民団体の市民を代表する使節団を受け入れられたことに満足している。

使節団一行は水曜日までトゥール地方に滞在し、日本のリセ・コーナン（甲南高校）、ランジェ市にある“コロール人形”を製造している企業、ヴヴレのカーヴ“アリアス”、老人ホーム“グーテンベルグ”、美術館（複数）、トゥール市周辺のシャトーなどを見学する予定である。

財団法人高松市国際交流協会設立1周年を記念して計画された、実に友好的な訪問である。



## 6. 所 感 集



## 市民海外親善使節団の旅

団長 財団法人高松市国際交流協会理事 櫻村 エミ

市民海外親善使節団一行15名の団長として、姉妹都市フランスのトゥールを主にパリ、ベルリンを訪問する11日間の旅をさせて頂いた。一行が事故なく無事に、市民サイド初の国際親善の実をある程度あげられたことを幸いに思い、まず、関係の方々に厚く御礼を申し上げる。そして、これも事前研修の機会が少なかったにも拘わらず、高松市内の民間交流団体の代表者たちで構成された団員が一人ひとり目的と自覚を持ち、和気藹々の中に協力しきちんと行動できたお陰と感謝いっぱいである。

今、この旅を振り返ってみると、視野が広められ、人の心の美しさを再認識でき、多くのすばらしいものを体得させて頂いた。そのいくつかを挙げてみて、今のみずみずしさを大切に、少しずつでも生かしていくように努力していきたいと思っている。



セーヌ川のほとりにて

パリのデファンス地区、ベルリン国際会議センター、トゥール駅前の開発などの近代建築群と街の活気に、新生ヨーロッパの息吹を身近かに感じた。それと同時に、古きよきものを後世に伝えることが、今の人間の義務であるとの努力が随所に見られた。由緒ある建築物とそれを囲む地域の建物の高さ制限、空襲を受けた建物の外壁のまだらな古い練瓦張り。トゥールの昔のありのままの生活の姿の生きた復元地区などに。

そして、何よりも、感心したことは、美しい庭園都市トゥールが花のような女性たちを主要ポストにつけていることだった。トゥールレーヌ・フランス語学院事務局長アダム女史、磨きぬかれたフランス語の快い響きに、教育内容のよさを思う。市役所の国際交流担当助役バイヨー女史、自信に満ちた魅力的な話しぶりに、自然と教育・文化・科学・産業との調和を大切にしていける施策に納得させられる。いきいきと活躍している彼女たち。まず、高松市が率先して若い女性の登用を願う。それが日本全体に波及するように。

また、街路樹のマロニエ、プラタナス、ぼだい樹の黄葉、TGVの車窓のゆったりとした田園風景、古城や宮殿を包む広大な森。自然は本当に美しく、私の心を潤してくれた。けれど、トゥール市役所の配慮と、それを受けた各所での温かい応待。仏日協会の会員のさりげない好意に、自然にまさる人の心の美しさを知ったのだった。

日本を離れて日本のよさを知るといえるが、その一端を私も実感してきた。パリ・ベルリン市などの大都会やトゥール市の活気も、街路樹の美しさも、名城・名園も日本にはそれ以上のものがある。もちろん高松市にも。瀬戸の海、小高い山々、多くの池や川と変化に富んだすばらしい自然がある。海のもの、野山や田畑のものと食べ物にも恵まれている。その中で市民たちは、個人として平和に幸せである。

けれど、心豊かな生活をしているといえるだろうか。恵まれた自然をあるがままに受け入れ、ゆっくりと憩い遊び、思索し行動していく。そこに、権利や義務を超えた真の人間らしい生き方ができるのではないだろうか。広大な美しい自然とキリスト教のバックボーンのもと、ヨーロッパ人は心豊かである。民主主義社会は成熟し、市民一人ひとりが古いよいものを大切に守り伝え、個人を尊重しながらもさりげなく他を思いやり、調和ある生活を営んでいる。

私は、今回体得した多くのことを、小さな力でも積極的に伝えていきたい。一人でも多く心豊かな市民をと。さらに、15人の情熱と知恵とを合わせて行動し、高松市が真の国際都市になっていくように人々の輪を大きく広げていきたい。

## 市民海外親善使節団に参加して

川岡婦人会書記 穴 吹 ヤ エ

雪景色のアンカレッジを經由して目的地パリーについたのは朝まだ早い時間だった。「これがパリーなんだ」心の高揚をおぼえながら税関を通り抜けた。昔の面影を残した建物が並び町並みは美しい。高層ビルは規制されているとか。エッフェル塔のすばらしさ、これも周囲の風景がよりいっそう塔の美しさを引き立てていた。ここにもビルはない。

コンコルド広場でマリーアントワネットの話を耳にし、シャンゼリゼー通り、マロニエの木、向こうに見える凱旋門と次々に目にしながらフランスの歴史の中にいる様だった。駅を改築して作ったオルセー美術館はモネ、ゴッホの世界で、又中央の大時計が印象的だった。そしてあのルーブル美術館へ。ナポレオンの戴冠式、モナリザ、ビーナスなど、去りがたい心を後に残して次の行程へ。



ビュー・トゥールにて

フランスが誇る超特急TGVに乗って山一つない一面平野のつづく美しい景色を見ながらトゥール市に向かった。わずか2分の停車時間に男性の皆様が大きなトランクを移動させたチームワークの良さに感激。

10月28日、トゥール市役所訪問。待つことしばし、バイヨー助役が見えられた。住宅政策、人造湖造り、学校、研究所、企業、又EC統合に向けてのEC国際会議会館建設、ロワール河の豊かな水を利用したトゥーレーヌ地方のペニス、5本の高速道路を通じてドイツ、イタリア、スペイン等へトゥール市が中心となることなど、次々に市政の計画を示された。ふり返って、我が高松市は？もっと市政に関心を持たなければと反省もつかの間、市役所内に結婚式場があり、職員が立会人となって式後婚姻届も提出でき、希望すればレセプションも開催できるという思いもかけない発想に国民性を感じさせられた。老人ホームでも自宅の家具をホームに持ち込み、壁も自分の好みに張ることができ生活を楽しんでいる様だった。



お目にかかった人達が皆健康で明るかったせいか、ホームの感じはしなかった。入所平均年齢80才で、なるべく家庭で暮らしてもらい、教会のお手伝いの方が一日2時間掃除や料理をしているという。でも寝たきりになれば家族やホームの人と相談の上、転居するそうで、やはり家族が面倒を見るということはどこの国でも大変な事の様であった。

コンパニョナージュ美術館の職人の芸術作品を見学した後、トゥールでの最後はロワール河沿いの古城めぐりだった。なかでも、高いプラタナスの並木通りを抜けるとシェール川を跨ぐ形で造られたルネッサンス様式のシュノンソー城は、フランス史において政治的文化的に重要な役割を担った城であったが、私は「6人の奥方の城」と呼ばれていることにひきつけられた。

ドイツでも、サンスージ宮殿、ペルガモン博物館を見学したが、戦争にあいながらも、フランス・ドイツ両国民の文化に対する関心の深さが数々の偉大な財産を後世に残しているのだと思った。今回の訪問で、自分の目で見て聞いて経験した事を、今後どの様にして生活に生かしていく事が出来るか課題を与えられたと思った。

## 市民海外親善使節団に参加して

高松商工会議所総務部次長 岡田 元一

平成3年10月26日（土）午前6時、夜明けを待つパリ・ドゴール空港に着いた。ヨーロッパの中核都市パリ、街なみが整然として、ゆったりした感じを受ける。雑誌やテレビなどのメディアをとおして、よく目にするものであるが、現実はその地に立って、万感胸に迫るものがある。歴史の重みだろうか。高松丸亀町商店街と姉妹提携しているカプシーヌ通り、立派な店が立ち並ぶ中を歩いてみた。ここにいる自分が不思議な気さえする。

夜のパリ見物に出てみたが、深夜過ぎても凱旋門付近は、車で身動きがとれない状況。交通事情の悪さがうかがわれる。

それにしても、ノートルダム寺院、オルセー美術館、ルーブル美術館など市内のすばらしい施設を見学して思うことは、百年を一昔



トゥール市街角

とするフランスと十年を一昔とする日本との価値観、人生観、生活観、あるいはスケールの違いといったものを感じ、また、人類が幾度となく繰り返してきた悲惨な戦争、更には文化と文明の相違について思いを馳せるのである。

現在に生きる我々は、さも当然のように平和を享受しているが、これは人類の努力の積み重ねによるものであることを決して忘れてはならないと思うのである。また、世界有数の経済大国となった日本ではあるが、一人ひとり豊かさを実感するまでには至っていない。心豊かに生活できる社会づくり。このことについてもう少し考えてみる必要があると思う。

さて、今回の使節団の公式行事として、トゥール市を訪問した。若々しい国際交流担当助役のクリスチャンヌ・バイヨー女史からトゥール市全体の縮尺模型により説明を受けた。模型は、一戸一戸の家まで正確に示されており、一戸新築のたびに修正しているとのこと。

開発計画及びその状況が一目でわかり、長期的かつ全市的な統一のとれた街づくりをされていることがうかがわれた。

トゥール市は、最もきれいなフランス語を話す地域だそうで、トゥーレーヌ・フランス語学院も設置され学生も多い。また、日本からも甲南学園が進出し、日本の国際化に一役買っている。

その他、コロール人形製作アトリエ、老人ホーム、トゥール美術館、ワイン工

場等見学。コロール人形の工場では、労働者の90%が女性、65才定年。労働環境としては、決して良いとは言えない中で、一所懸命作業に従事しており、彼女らの勤勉さが目についた。

トゥーレーヌ仏日協会より、レセプションのお招きを受け、はじめてみる民族舞踊はすばらしいものであった。そして、Lucette TURPIN女史、Bernard TARDIF氏、JAMETご夫妻、Philippe GRISON氏、Erik COLOMBEAU氏 はじめたくさんの仏日協会の方々と知り合うことができた。

ディナーの際、隣に坐られたYvonne JAMETさんのやさしそうな笑顔は忘れられない。言葉が通じなくても、気持ちは通じるものだ。親善使節の一員としては、ほんとうに心温まる一夜を過ごすことができた。

名残りを惜しみつつトゥールを離れて、ロワールの古城めぐりののち、隣国ドイツ・ベルリンへ。

社会主義・計画経済の破綻と国民の民主化要求の高まりを背景にドイツ再統一という歴史的転換を成し遂げた国。経済難民の流入、ネオナチスの台頭、犯罪の増加等社会・経済両面においてさまざまな問題を抱えてはいるものの、西側諸国の中で米・日に次ぐ産業国であり、活力ある国という感じを受ける。デパートには品物が溢れ、買物客でごったがえしていた。統一後、観光客も大幅に増えているそうである。ちょうど、ヨーロッパ外相会議が開かれ、交通規制のせいか混雑はなほだしい。この国もフランスと同じで通りは車でいっぱいだ。ドイツ政府はこのような道路事情の悪化を解消するため、公共交通機関の利用促進策を打ち出し、最近では格安料金（3マルク程度、1か月定期（環境定期と称する）では60マルク程度）で2時間以内どの交通機関もフリーパスといった施策をとっているとのこと。当高松市においても道路事情は同じ。何らかの参考になりはしないかと思った次第である。

また、世界最高峰を極めるベルリン・フィル、歴史上有名なポツダムなどを見学して感慨深いものがあった。

最後に、今回の市民海外親善視察団に格別ご配慮頂いた(財)高松市国際交流協会の役員並びに事務局ご担当の皆様方に厚くお礼を申しあげるとともに、櫻村団長さんをはじめ参加した各界の皆様より温かいご指導を賜りましたことに対し、深甚なる謝意を表します。

## 訪 欧 感 想 記

高松ライオンズクラブ幹事 川 井 浩 三

この度、高松LC幹事として訪欧の機会を得た。以下各地で印象に残った感想を述べます。

まず、パリオルセー美術館。

フランソワ・ミレーの「落ち穂拾い」は、旧約聖書のルツ記の世界を彷彿させた。農園主ボアズの畑でせっせと落ち穂を拾う3人3様の女性がすべてルツだ。ミレーは、3,000年前のカナンの地の信仰に根ざした美談を、叙情性横溢する風景画の中にしっかりと描いている。

ヨーロッパ文化の底流に聖書がある。ヨーロッパの常識は、日本の非常識だ。

トゥール市役所で、マダム・バイヨーに会った。フランス人形のようなとびきりの美人で着こなしも最高。この方が助役と聞いてびっくり。日本ではまず考えられない。EC統合に伴うトゥール市の役割等いろいろ説明があった。

トゥーレーヌ仏日協会が心温まる歓迎会を催してくれた。ツールパン会長（女性）は、しなやかで名前通り鶴のイメージがした。我が親善団も榎村エミ団長のもと、この夜は最高の国際交流が出来た。

嬉しかったのは、ライオンズのメンバーに会えたことだ。ギー・ラブリュスという67才の大変陽気な男性で、リーブ・デ・ジュールクラブに所属しているとのこと。彼の友人を通訳に、英語で身振り手振り話した。クラブは、38人のメンバーで例会は月1回（第1木曜日夜8時から）終わりの時刻は不定で、時には日が変わることもあるそうだ。ちなみに我が高松LCは月2回75分間の時間厳守だ。



ベルガモン博物館にて

Activity（奉仕活動）は盲人用図書館の建設に現在力を入れているとのこと。やはり、LIONSはInternational（国際的）で、Domestic（国内のみ）ではないことを実感した。

さて、ベルリン。

ベルガモン博物館で、Babylonの遺跡に会えるとは・・・。

紀元前586年にこの城を建てたネブカデネザル王のバビロン捕囚によりイスラエル最後の2部族が滅ぼされた。2,600年の時間と空間を越えて、今尚、青光りす

るタイル壁の上に金色の動物彫像が躍動していた。王の夢の意味を解き明かしたあのダニエルやエゼキエルもこの門を見たのかと思うと興奮した。

ルーブルといい、ベルガモンといい、フランスやドイツは本当にえらい。

戦前と戦後の中継点にポツダムがある。世界の巨頭がここで一堂に会し、日本の無条件降伏を決めた。会場のツェーツィーリーエンホーフ城はフリードリッヒ大王の巨大な夏季用レジデンス、サン・スーン（無憂）の離宮にあたる。1945年7月アメリカ大統領トルーマンは、日米戦の大勢が決していたにも拘わらず原爆投下の指令をこの場所から出した。

去年は、真珠湾50年。折しも日米経済摩擦が白熱している。アメリカは最近この事件をタイムリーな政治道具に使っているが、それは不条理だ。広島、長崎を思う時私はそう思う。

さて、兄弟（統一ドイツ）が喘いでいた。運命とは言え長い間不遇を困った弟の為にだ。失業率 西5%、東15%。だが親(旧ソ連)に捨てられた他の東欧諸国に比べればたいしたことではない。伸身の為の屈身なのだ。

今年(1992)はEC統合の年である。ヨーロッパ合衆国は世界の政治経済文化の中心となる。その中心にドイツがなる。周り(英仏他)は暗い過去(ナチス時代)をちらつかせながら警戒の鐘を鳴らしている。本人も反省を装いながらも統一を果した。臥薪嘗胆をしているのが現状だろう。

車窓から見るドイツの道路工事は、働き手が皆若くしかも手作業が多かった。ヘルメットはかぶらず、作業服は着ず、バリケードはない。安全面がおろそかだ。発注者の管理はどうなっているのだろう。

フランスのコロール人形工場のタイムレコードカードを全部見たが、土・日曜日は完全に休んでいた。但し、月～金は7:30～5:30を全員がプリントしていた。年間5週間は国民全員が特別休暇を取る義務と権利を有している。何の為に働くのか。何故生きるのか。何を何より優先するのか。フランスを観て精神文化の高さに感銘した。

国にしる、会社にしる、集団の利益という大義を唯一無二の目的とする日本株式会社は、人生の価値観のあり方においてフランスにはかなわない。

悠久の大河ロワールのほとり、中世の古城が人間の限りなき愚かな欲望と儚きロマンを語り続けている。永遠の今であることを強く感じながらシャルルドゴールを後にした。

あと書き

高松市国際交流協会と我が高松LCに感謝します。樫村団長、事務局職員、日通平野氏そして親愛なる全メンバーに『ありがとう』と心から言いたい。

## 「パリ、トゥールそしてベルリン」

香川EC協会会員 佐藤理恵

私が欧州を特に興味深く眺めるようになりましたのは香川EC協会の関係でヨーロッパフォーラムで勉強させて頂いてからでした。

是非一度自分の肌で欧州の空気を感じてみたい、と思っていました矢先に今回の親善使節団に参加し、大変有意義な旅を経験させて頂き大感激でした。

夢にまで見たパリに到着して2日目の午後、モンパルナス駅よりフランスが誇る新幹線TGVに身を託し、ビュッフェでワインと洒落ながら通り過ぎる車窓の景色を眺めつつ、フランスは農業国であると認識させられました。花の都パリ、流行の先端ファッション、ルーブル美術館と単純な発想ばかりしていましたが私の目の前に、麦の刈り入れが終わったばかりの茶色の畑と牧草地とが地平線まで続いていたのです。



横揺れも全く無い快適なTGVは約55分でトゥール市に到着。煉瓦色の赤土と小雨ふりそぼる灰色の空に石畳の町、そして荘厳と表現するのがピッタリな市庁舎・駅舎等建築物とのバランスがなんとも言えず印象的でした。

28日朝、市役所を訪問。とても若くて素敵なフランス女性バイヨー助役よりトゥール市街化計画等について詳しく熱心なご説明を頂きましたが、なかでも一番驚いたのは古い建物を復元し直す政策をとっていることでした。建物の内側だけを近代的に作り直し、生きた町に再生させ色々な社会階層の人々の居住地にしているとのことなのです。木の恵みによって形成されてきた日本と違ってここは「石」の文化なのだと思つづくと思いました。又、庭園の都と呼ばれ中世以来の美しい建物が立ち並ぶ観光地トゥール市も、今やEC統合に向けて着々と準備をしているのです。西欧主要各国から等距離にあり、5本のアウトバーンが交差する十字路地点に位置するという地の利を生かし、駅前に国内で4番目の規模の国際

会議場を建設中、併せてホテルも建設ラッシュということなのです。近い将来このトゥール市も国際会議開催地として世界の注目を浴びる日が来ることでしょう。

教育面にもいろいろな配慮が見られました。私は、言語教育に対する姿勢に大変興味があったのですが、トゥール市では今年から試験的に小学4年生から独語又は英語の選択授業が採り入れられているそうなのです。あるクラスでは25人の内23人が英語、2人が独語を選択したそうですが、郊外の小学校にはそのための教師が不足している等の問題もあるようでした。ECが統合すればより一層人・物・資本・サービスの自由な行き来が可能になり、言葉による障壁も無くなっていくことが望ましいのでしょうか。

今回パリ、トゥールに続いて全世界の目が注がれている統一後1年のベルリンを訪れた訳ですが、東西分断の壁跡を見るにつけ、民族問題・宗教問題等々、島国に生まれ育った我々日本人には理解しにくい問題が山ほどあり、様々な人種が長い歴史を歩んで来ていることを実感させられました。

29日の夕べ、トゥーレーヌ仏日協会の方々から熱烈な歓迎を受け大変感動を致しました。言葉に不自由しながらも相手を理解したい、その気持が大事なのだとつくづく考えさせられた一時でした。

最後にこの使節団をお世話して下さった高松市国際交流協会の方々、添乗員の方、又、色々のご指導下さった諸先輩の方々に心から感謝申し上げます。

## 市民海外親善使節団に参加して

仏生山国際交流会マネージャー 高橋 勝子

花の都パリ、高松市の姉妹都市トゥール、45年ぶりのドイツ統一後の首都ベルリン等の訪問、私にとって初めてのヨーロッパは男性7人女性8人のチームメイトとの11日間の視察の旅となりました。心身共々バッチリの構えで高松を後に、北回りのアンカレッジ経由でパリ到着。時差ぼけも苦にならず、絵画や映画の中でしか見た事のないノートルダム寺院、凱旋門、エッフェル塔を見学。昨日まで高松の街を歩いていた私が今シャンゼリゼー通りを歩き、歴史上の宮殿や広場に立っている事が信じられなくうれしい気持でした。

並木の街路樹がとても大きく立派で、マロニエ、プラタナス、菩提樹、多種類の樹木がすばらしく、歴史を感じさせ印象的でした。博物館、美術館の視察で目のあたりにしたミロのヴィーナス、モナリザは、以前二度とお目にかかる事がないと、3時間も並んで見た



ベルリンにて

実物です。美術の教科書で習った本物の芸術と再会し、13～14世紀にタイムスリップした私は、胸がときめきながらの数時間でした。また、目に入る建物、風物すべてに興味津津で案内役の文学青年？の説明に、バスの窓中から夢中でシャッターを押し続けました。

高松の姉妹都市トゥール市では、駅や市役所など新旧の建物が見事に調和していました。市役所旧館の宮殿内を思わせるホールは市民一般にも貸出しされており、また市議会議場はボタン一つで可否が集計される現代的設備が取り入れられていました。トゥーレーヌ甲南学園では、高松からの2人の生徒が親元から離れて生活と勉強をしていました。私はまるで母親の気持で校長先生や生徒と話をしましたが、我が子と重なってなんとしっかりした子供だろうと感心しました。女生徒さんの方は、なんと長男の会社の社長さんのお嬢さんと知り、トゥールがとても身近に感じたひと時でした。老人ホームでは、入居者の皆様がそれぞれ若々しく、また暗さを感じさせない住居でした。さらに、トゥール市内が一目でわかる



模型でのフランス美人の助役の説明で聞いた事を思い出しながら、歴史的建造物保存地区のほか、その近くの市民市場の生鮮食品コーナーなどを見学し、主婦に戻った気がしました。うさぎや鳥をそのまま陳列しプライスがついていたのにはびっくり。

トゥーレーヌ仏日協会のレセプションでは、通訳を交えての和気あいあいでの懇談の輪がひろがりました。学生や一般の受入れは、高松市では、いかがでしょうか？ トゥーレーヌ仏日協会は、いつでもホームステイのシステムが出来ているとの事。今後、文化や経済等での交流をして行きたい事を希望されていました。

私も、フランス刺しゅうを多少しており、刺しゅうを通じて（展示会が出来れば）国際交流が出来れば大変うれしく思います。2年後ぐらいを目標に戸塚刺しゅう高松支部で作品作りに頑張りたいと思います。

ロワール河の古城巡りでは、森の中のお城やゆったりとした河の流れに、うっとり。「もう一度ゆっくり来たいなあ。」目も頭も穏やかになるトゥールの視察でした。

東西ドイツ統一周年を迎えたドイツベルリンで興味深かったベルリンの壁。街並が何んともなく暗く感じるのは、天候のためだろうか？ 東西を分けたブランデンブルグ門、ペルガモン博物館、広大な庭のサンスーン宮殿、今でもぞっとするドイツの秘密警察地下趾など、現在でも多大な歴史が残るドイツ、今から全世界が注目する新しいドイツです。私も小さな新聞記事でも「ドイツ」に目がとまる様になりました。

今回の視察で、どこまでも、どの場所にでも観光の日本人と、働く日本人に出合った事は、小さな島国の大きな日本人である事を、私自身、誇りに思いました。最後にこの視察団を企画された市国際交流協会の方々、お世話頂いた皆様、大変有難うございました。楽しいチームメイトの方々、有難うございました。

合 掌

## 市民海外親善使節団に参加して

仏生山国際交流会会員 竹田 靖子

ホテルの窓からは森が広がり、サルビアやペゴニアの花が咲き乱れ、とても心落ち着く場所。

「フランスの庭」と呼ばれるトゥール市は、パリの南西約235キロメートル、高松市の姉妹都市でもあり、市の中心部を流れるロワール河にはぐくまれ、今でもその河沿いにはアゼ・ル・リドー城やルイ11世で知られるロッシュ城等、ロマンの香り高い多くの美しい古城が残っています。

トゥールは歴史と伝統の町なのです。

私達はトゥールで熱烈な歓迎を受け、団員15名皆、滞在中は大変ハードなスケジュールではありましたが、穏やかに過ごすことが出来ました。

トゥールを訪れた中で、私が印象に残った事が二つありました。

先ず一つは、トゥールにある甲南大学のトゥーレーヌ甲南学園です。百名近くの日本人中学生そして高校生が学んでおります。素晴らしい環境と自由な校風、そして何よりも、成長途中の子供達が海外で、色々な国々の人々と接して日常の中で国際交流を体験している事、国境を越えて世界的な視野に立った物の見方ができる事等、日本にいる私達が見ると羨ましい限りです。これから日本を支えていくであろう若者達にとって、ここでの経験は素晴らしいものとなることでしょう。



ブランデンブルグ門(ベルリン)にて

そしてもう一つは老人ホームです。

60才以上の方が2万5千人いるトゥール市では、8か所の老人ホームがあります。

ここでは費用のあまり払えない人でも入所出来る様な仕組みになっており、福祉が充実していると感じた次第です。

老人達の生活は、画一的なものではなく、自由な生活を楽しめる様になってい

ます。例えば、自分の家具を持ち込めること、そして彼らの食事は本人の意志により部屋で自分で作り食べることが出来るなど日常生活を楽しめるようになっていきます。

滞在中私にとってのビッグニュースは、トゥーレーヌ仏日協会の人々が私の生け花に大変興味を持たれ、出来るだけ近い将来、日本の伝統文化を多くのトゥールの人々に紹介したいので是非花の展覧会を開いて欲しいという話が出た事です。

訪れて、すぐにこの町が好きになった私にとって願ってもないことです。一日も早くこの企画が実現することを祈っています。

10月30日、フランス・トゥールを発ち、15名の使節団は、ドイツの首都ベルリンへ向かいました。

1990年10月3日、東西ドイツが統一され、ベルリンの壁が壊されました。私もみやげ店で19.5マルク（約1,530円）で、この石を買いました。一つの民族を二つに分け、自由を奪われた人々の歴史は、この石の様に崩すことは出来ないのです。

今、世界は大きなうねりの中、ゆっくりではあるけれども軍備縮小の方向に向かっていきます。今回の市民海外親善使節団は、私にとって世界の動きを身をもって体験する事が出来たことに多くの方々へ感謝したいと思います。

歴史を動かすのは、民族の小さな力、行動からだと思います。私も生け花を通して人々の生活に夢を与え、国を問わず活動を続けて行きたいと思います。

最後に今回のこの旅行に関して団長さんを始め、事務局の方々、又添乗員の方に大変親切にして頂き、有意義に過せました事を、心から御礼申し上げます。

# Le Voyageur

ドーナツ会会員 谷川和子

たよりないうす明り 沈む日の メランコリヤを野にそそぐ—————

ヴェルレーヌから始まりランボー、ボードレール、アラン・ドロンにイヴ・モントラン。フランス詩文とフランス映画に若き日が象徴されるとしても、ついぞ訪れることのなかった、いや、訪れる必要性を感じなかったこの国に、いま、私は足を踏み入れようとしている。飛行機の窓から見えるパリはダイヤモンドをちりばめたかのように輝き、まるで、あなたの大切な宝物はここですよ、と言わんばかりに私を待っていた。

しらじらと夜が明け始め目の前にパリが姿を現し始めると、高揚した感情は頂点に達し心臓の鼓動は怒濤の如く襲いかかってきた。遠く近くに見える現実の景色とは裏腹にボードレールのことばが紐といた神話の響きにも似てよみがえってくる。



ロワール河沿いのランジェ城にて

—— 遠くまじり合う長いこだまのように夜のように 光明のように果てしなく暗くて深い統一のなかに薫りと色と音は互いに照応する。——

日常からの脱却はかくも簡単なものかと我が身の順応性に驚嘆しつつパリ観光は続いていく。シャンゼリゼ通りを歩けば多民族の融合に目をみはり、プラタナスやマロニエの葉の色づきに、セヌ川を渡る晩秋の風に、歴史という長いときの流れのほんの一瞬に染められているパリを感じる。かのサルトルも出入りしたというカフェに座れば私もモンマルトワ。あらゆる文化が混在するパリを後に悠久のときをかけぬけてTGVは走り行く。セピア色に染まる夕暮れのロワール河。自然のなすがままにそのときを流れてきた水に神の仕業の偉大さを感じ、自然と共存しながら歴史を作りあげてきた人々の抱擁力にこの国の大きさをみた気がする。フランスは異文化の十字路なのかもしれない。

果てしなく続くかと思われる田園地帯を走り一路空港へ、ベルリンへ。東西を

隔てた壁が崩壊してから1年。マスコミを通じて知った様々な光景が脳裏をかすめる。が、事実はすでに次の歴史へ書き替えられ始めていた。与えられた人生を生きていくことのみが日々の営みのように地味に地道に生きてきた人々が確かに存在していた事実を事実として新しい歴史に作りかえようとしている。私など一生かかっても持ち得ない力をこの街の人は持っている。冬の訪れを告げるような風に吹かれるポツダム。そこはかたしれない歴史の重みが風に舞かれて積もった落ち葉に重ねられている。

再度訪れる街は不思議なものでなじみ顔。上っ面しか知らなくたって随分と知っている気がする。パリはなんたってフランス。自由と博愛の国。あらゆる文化が調和よく共存して見事なまでに融合している。もっと知りたいと思いつつ旅には終わりがある。

ボードレールと出会って20年。どこかにそっとしまっていた玉手箱のふたが開けられて新しい旅がいま始まったようだ。そう思うと今回の旅行も起こるべくして起きたことなのかもしれない。あのベルリンの歴史のように人の歴史も始めから分かっているその核を中心に旅を続けているのかもしれない。歴史とは始めからそうなるようにできているのだろうか。11日間の旅は終り私の日常がパリからトゥールからベルリンから消えた。

## 市民海外親善使節団に参加して

高松ロータリークラブ国際奉仕委員長 田村 日出男

高松市国際交流協会が企画された市民海外使節団の各団体から構成される15名の団員の中に、ロータリークラブ員として加えさせて頂きました。

10月25日出国し、パリ入りをして、27日に、フランスの誇る新幹線TGVで、トゥール市に向かった。TGVは、快適な50分余りの旅であった。

翌朝、多少雨もようのお天気とはなったが、トゥールの市役所を表敬訪問する。この行事は、公式行事なので、一同正装することを申し渡される。市役所の会場にある一室には数メートル四方の巨大なトゥール市および周辺の精巧な模型図が据えられており、一行はその周囲に座って、各自、自己紹介の後、美人の市の国際交流担当助役のバイヨー女史から、市の概要および将来計画まで一時間余にわたって詳細な説明を受けた。

女史は、トゥールの沿革から説き起こし、将来はハイテクの工場を誘致したいので日本からの協力をよろしくとPRされた。



バイヨー助役(左端)と握手

その後、迎賓室で簡単なレセプションがあり、贈り物の交換などが行われたが、その部屋は美術館か迎賓館の一室かと見まがうばかりで、天井にも美しい壁画や、周囲にも立派な彫刻がしつらえられ、県都とは言え、人口13万余の市庁舎としては随分立派な部屋だと感心させられる。この部屋は、時には市民の結婚披露宴などにも開放されるとのこと。

この訪問の様子は、翌日の現地の新聞にも取り上げられ、「単に、市当局者だけの訪問団でなく、一般市民代表も含めた親善使節団であることに意義がある。」と紹介されていた。

次いで、トゥール市郊外に昨年4月に開校された、トゥーレーヌ甲南学園を見学に行く。ここには高松市からも、附属中や城内中学から男女1名ずつの生徒さんが留学されており、持参の郷土の菓子を差し上げると大変喜んでいただけた。こうした若い人たちの経験が、将来国際感覚豊かな人格の形成には大いに役に立つことを確信する。

翌日は、トゥール市の老人ホームの見学からスタート。老人ホームといっても

私たちのイメージしていた孤立した養老院ではなく、街の中にある普通の建物を買収して、そこへ希望する高齢者を入居させている高齢者集合住宅とも言える施設で、ここもお隣りは、スーパーマーケットがある何の変哲もない一棟の建物である。トゥール市にはこのような施設が8カ所あり、月最低3,000フラン（約72,000円）の支払いが可能なら入所でき、ここでは現在72名が入所しているということ。また17フランを出して食事だけのサービスを受けられる制度もあり、いわば地域住民との交流の場が用意された開かれた施設であるとの説明を頂く。許しを得て、お年寄りの部屋を拝見させていただいて、その美しく整頓されている様には、全く驚きであった。ご自分の愛用の家具を持ち込み、ある方は結婚式の写真やご家族の写真で壁を飾り、また、まるで少女のお部屋のように人形をきれいに並べ立てておられる方とか、その素晴らしい美的感覚でホームライフをエンジョイされている人生の過ごし方に私たちは深い感銘を受ける。

その後、美術館や歴史的建造物保存地区の散策などを終えて、夕刻宿舎のアリアンスホテルで行われる仏日協会のレセプションに向かうべくバスに乗りこむと、バッテリーの故障でバスが動き出せず、レセプションの時間も迫って気が気でなく、遂に皆でバスを揺するという羽目にまでなったが、幸い代わりにバッテリーが届いて辛うじてセーフというハプニングも起こった。

仏日協会のレセプションでは地元の方の心づくしの民族衣裳を付けた踊りが披露され、その後立食パーティに続いて、日仏の人たちが交互にテーブルを囲んだディナーとなって歓談と友情の交歓が続いた。パーティ参加者の中に、東京ロータリークラブからの奨学金を得て、金融経済の勉強に来ている西部さんという方にもお会いでき、是非トゥールのロータリークラブの例会に出席するよう勧められましたが、スケジュールの都合で叶わなかったのが唯一の残念事であった。

かくて楽しくも印象深いトゥールの二日目の夜は更けて行った。

## 市民海外親善使節団に参加して

香川日独協会会員 平井隆信

### ◎目ざすは一路花のパリー

10月25日、15時20分、高松市国際交流協会の事務局長さんほか、参加者のご家族の見送りを受け、高松空港を出発、26日早朝、パリーに到着。

芸術の町、ファッションの都、革命の首都パリー、重い歴史を刻んだ石造りの建物、そして新しい建物とが共存している町、その中に、中世ゴシック建築のノートルダム寺院、「モナリザ」の絵画、「ミロのヴィーナス像」のあるルーブル美術館、そして「落ち穂拾い」の絵画の掛っているオルセー美術館、香り高い芸術作品の多い町、パリー、正にパリーの魅力は無限、この汲めども尽きぬ都パリーを後に、次の目的地、トゥールに向う。

### ◎姉妹都市トゥール

小雨の降る朝、トゥール市庁舎を訪問、国際交流担当助役のバイヨー女史より、市庁舎の模型室で歓迎の挨拶と市の概況について説明があった。



ベルリン日独センターにて

トゥールは1790年以降ロワール県の県都として、経済、観光、文化の中心地として栄えた。中でもワインの産地として定評があり輸出も行っている。

近代的なものは化学工業、医薬品工業、機械工業、電気工業、プラスチック工業等がある。又近々、ヨーロッパを縦横に貫通する軸の交差点（フランス、スペイン、イタリア、ドイツ、イギリスの五大幹線道路の交差点）となる。従って新しい経済空間と各種ビジネスセンターが形成される。

特に最近はパリーの地価が上昇しており、トゥールはパリーの隣接都市としての役割が大きくなっており、目下、専門大学、研究所、産業の立地を図るテクノポリスを建設中と熱っぽく、そしてエネルギーに説明してくれた。

翌朝、地元紙が我々の訪問記事を掲載していた。



今回の公式行事のもう一つに、トゥーレーヌ仏日協会との交流が組まれていたが、歓迎パーティーの会食時、トゥーレーヌ甲南学園校長猪熊真氏（東京オリンピック柔道の優勝者）と同席出来た事は旅の思い出の一つであった。

#### ◎東西の壁、崩壊後のベルリン

45年ぶりに首都に帰り咲いたベルリン、そのベルリンの中で旧東西の格差を見た。

かつて旧東独は東欧の中では「経済優等生」といわれていた。その首都旧東ベルリンがあまりにも西との格差があり過ぎるように思えた。

最近西側にとっては東西ドイツの統一への失望感すら感じられるとかいわれているが、それは旧東独経済の不振が大きい事を物語っているような気がした。

#### ◎むすび

今回の旅で海外から日本を見なおす機会が持てたこと、職域の異なる人達との輪が広がったことが大変意義深いものであった。

最後に高松市国際交流協会と香川日独協会に対しお礼を申し上げむすびといたします。

## 市民海外親善使節団に参加して

高松中央商店街振興組合連合会理事 古川 新 二

私は大正14年3月1日生れで当年66才なので自分自身参加することには一抹の不安がありました。商店街側からの要請があったことと、ヨーロッパへは過去何回も行ってたこと、さらに英語にはある程度の自信があったので参加することになりました。

今回の旅行は今までの観光旅行と違って高松市国際交流協会が選んだ実に素晴らしい女性8名、男性7名の方で、添乗員の平野さんの要請する時刻には必ず集合され、又シャンとした英語で用を果す方も多数居られ実に気持ちのよい旅行でした。

さて、私はトゥールへの訪問は2回目ですが1回目は市役所へ立寄っての2時間ぐらいのものでしたので、市中の様子は全然不明でした。今回はトゥール市で3泊なのである程度トゥール市のことが判りました。初日市役所新館の5階でトゥール市の模型を前にして立派で然も美



ビュー・トゥールにて

人の女性助役さんが長い棒で各所を指し乍らの説明は誠に良くトゥール市が理解出来、振り返って高松市も同じようなものがあればよいなと思いました。又旧館の玄関から広い立派な階段を歩いて上った階上の広間のすばらしい壁面の彫刻やハイテク化の市会会議場は大したものだなあと思いました。

トゥール市での視察見学の際に、商店街の代表として商店街に一番関心があったので、バスの窓より目を皿のようにして眺め、また短時間ながら商店街を歩いて、二、三の商店に入って見ました。わかったのは、トゥールの新市街の市役所の横を2千メートルの直線の商店街があること、その商店街は高松の中央通りから中央分離帯をのぞいたとほぼ同じ幅員で築港から公園までと同じ長さの立派な商店街であったことです。又そこから直角に入った旧市街の網目状の商店街の歩道の買物客、見物客であふれ返っている賑かき、さらに個々の商店の立派さ、きれいな陳列には高松の丸亀町もたじたじであろうと思いました。

パリでは、郊外地区に段々新しい高層ビルが出来ているのが目につきますが、中心に変化が起きないようにしたいものですね。

ベルリンは、予期はしていたもののやはり気温は低く池が凍ってアヒルが氷上を歩いていたのが目につきました。ベルリンというのが東京都と大阪府を合わせ

た大きさというのとブランデンブルグ門の通りがパリのシャンゼリゼの2 kmの倍の4 kmあるのを実際に見て吃驚しました。旧西ドイツのキラキラと晴れやかな建造物や個人の家に較べて、西ベルリン側も東ベルリン側も灰色の暗い感じであるのが目につき、特に東ドイツ側の家の補修もしないままのが気の毒でした。然しベルリンの中心地にある投宿したペンタホテルの周辺のクーダム繁華街はいつも人で一杯で物凄く消費景気があるのだなあと思いました。

ベルリンで残念なことは来た時は夜で出て行く朝は曇天で空からベルリンが見えなかったこととベルリンで散髪が出来なかったことでした。ホテルの近所のベルリン一番の百貨店のK・D・Bに入って聞いたら内部に理髪店があるというので行ったら断るので、理由を聞くとものを言わず態度で×サインをするのでもうあきらめました。多分ジャンパーとノーネクタイで行ったからだと思いました。

戦争遺跡があっちこっちに残っていて見学している人も多く、その中にロシア兵も多数いるのが目につきました。

東ドイツ側のポツダムの家並が、壁が落ちたままで放置してあるのが多数ありました。私の年代の人には記憶に焼き付いているポツダム宣言の行われた会議室、何回も新聞、雑誌での写真や映画で見たものを実際に見て、又ヒットラーが自殺した防空壕あとの土の盛り上の跡と共にあの当時の威勢のよかったドイツを思い出して感慨一しおでした。

最後に、この旅行中にはアクシデントが二つありました。一つはトゥール市の老人ホーム訪問時、エレベーターが過重の為地上階へおりた時、留めリレーをのりこえて下へ落ちたため扉が開かず20分位とじこめられました。私の想像では、当日日曜日なのでエレベーター屋が来るのに1時間か2時間ぐらいかかるのかなあと思っていたが20分位で外に出られてやれやれでした。もう一つはトゥール市内でバスのバッテリーが上ってしまってこれも30分位待ったことでした。アクシデントというものはいつ起るやら判らんということです。

この旅行にはじめから一人部屋を取れるようにして戴いたことは大変ありがたかったと思います。この為この旅行を非常に快適に過せたので企画なさった方に感謝します。

皆様に大変お世話になりました。

## 市民海外親善使節団 フランス、ドイツ訪問を終えて

高松ユネスコクラブ会員 古川由恵

私がいちばん行ってみたいと思っていた国、フランス。こんなにも突然に行ってきてしまいました。そして、いちばん好きな国となりました。

10月25日から11月4日まで、私にとって初めての海外旅行でもありました。

朝まだ暗いドゴール空港に着陸した時、アンカレッジ経由での長い空の時間が、フツとかき消される思いがしました。ああ、やっとフランスに来たのです。憧れのフランスだったのです。

パリは想像以上の都市でした。全体が美術館であり、博物館であり、芸術そのものなのです。文芸、音楽、絵画、彫刻、建築、庭園、町造り、料理等々、感動と感激のバトルとなりました。歴史の重味にもずいぶん圧倒されました。ノートルダム寺院、エッフェル塔、ルーブル美術館、オルセー美術館。歴史



ロワール河沿いのマロニエ並木

的なもの、伝統的なことがら等、改めて大切にすべきことだと痛感致しました。

パリからTGVで約1時間、列車に乗りかえて5分後、石と鉄で作られたステキなトゥール駅に着きました。駅から出ると、そこはもうトゥールの風がふいていました。ここが姉妹都市“トゥール”なのだと自分によく言いかけました。高松市と縁があつての“トゥール”なのだ。

トゥール市役所表敬訪問のほか、トゥーレーヌ語学学院、トゥーレーヌ甲南学園、コロール人形製作アトリエ、ヴヴレーのワインカーヴ、老人ホーム、トゥール美術館、サンガシアン大聖堂、コンパニョナーージュ博物館etc 多くを回りました。もっと、もっと、時間がほしいと思うほど興味はつきませんでした。

トゥーレーヌ仏日協会のレセプションも有意義な楽しいひとときとなりました。テーブル別の夕食会では、トゥールの方々が情報および産業をも含めての経済交流を強く望んでいるように感じました。なんとか何かのコネクションを

探そうとしているのはわかるのですが、その何かの特別なものを持っていない一主婦の私には、どうすることもできない事柄ばかりのように思えました。まさに、ワインを多く飲むことぐらいでしょう。

市民レベルでの使節団となっただけでしたが、同行された方々は皆様それぞれに地位も名誉も財力もおありの方々ばかりで、私は本当に市民レベルだと実感致しました。でも、こんな私が、団員の一人としていろいろ感じたことや思うこと、体験したこと等を、身近かな方々にお知らせしたり、お伝えすることも“お役目かな？”とも思っております。ホームステイ形式の交流がなかったので、トウールの一般家庭の雰囲気を感じることはできなかったのは残念に思いました。

日本という自分の国をほんの少しですが外から見ることができました。そして、高松を、我が家庭をも距離をおいて考えることができました。日常生活を反省し、自分自身を見つめ直す機会でもあったように思います。

突然あるであろうその何かの為に、地道に、大切に、しっかりと時を過ごしながら充電する今日このごろでございます。

関係の皆様、どうもありがとうございました。

豊潤で、婀娜かなロワール河を 思い出しながら……

Merci Beaucoup !

## 市民海外親善使節団に参加して

古高松地区連合自治会長 山田 忠 慶

国内旅行も満足にできないのに、ましてや外国の親善訪問旅行など辞退しようとお断りの相談をしたら、逆に勧められ励まされて一行に加えさせていただきました。

訪問国の慣習、マナー等も無知のまま又覚える暇もなく、不安一っばいで旅立ちました。公式訪問が終るまでは、私のことで御迷惑を掛けないようにと心掛けておりました。

トゥール市庁では、模型により市の歴史と今後の計画を、超ベテランの通訳を通しての説明があり、我々にも十分理解が出来ました。特に都市の再開発と理解すべきと察せられましたが、低所得者層の住宅も建築し確保しているようでした。



トゥーレーヌ仏日協会歓迎会にて

人口増加に国をあげて取り組んでいるようにも伺いましたが、市も当然これに協力しているのでなかろうかと思いました。

模型を囲んで議論好きだと云われているフランスの方々、どんなテーマで議論するだろうか。

夕方、町に出てロワール河畔に立つ時、川岸にずらり並んだポプラのシルエット、夕焼雲が薄紫に染まり、その薄紫の雲の色と遠く市街地のネオンの灯が川面に映え又彩りを副える。

私が市民であったとしたら、この素晴らしい風景は永久に残したいと思う。

人間は大自然に生かされているのであるから、やはり自然を大切に・・・とかなんとか議論をするだろうか。

次にお城はよかった。珍らしかった。料理する処と食事する部屋が遠いから、食物は大方冷えたものばかりしか口に入らなかったのではなかろうか。

それにつけてもフランスのワイン。

ヴヴレ地方のワインの里、特にワイン貯蔵庫は、傾斜したブドウ畑のある山の中腹をトンネル状に掘って、通路の両側に瓶詰にしたワインが薪を積んでいる様な状態で、整然と貯蔵されていた。

親の代からの、俗にいう年代物といわれるものもあるのかも知れない。私の生れた年のもあった。1904年といえば日露戦争が始まった年であるがそれもあつた。それらは私の趣味で残して居りますと所有者である親は言う。息子さんは側で私達にワインを注いでくれる。ほの暗い豆球の下で、年中15度の温度を保っている。10年前も又10年後もこの温度が変らぬと同じように、これからもブドウとワイン造りの農家を続けるという、堂々とした歴史と自信を見ることができました。

ベルリンの東西に区切られた壁跡に立ち、政治のありかたの差をまのあたりに見ることができました。

私達国民は、有能な政治家に恵まれることを痛切に感じました。

自由主義経済の一員として、旧東ドイツの復興が一日でも早く進む事を祈ります。

## トゥール市訪問所感

事務局 藤本良志美

今回の市民海外親善使節団は、高松市内の民間交流団体の代表者で構成されており、団員皆様が、それぞれの立場でしっかりした意見を持つ方々なので、充実した親善訪問の旅となりました。

10月27日、パリ・モンパルナス駅からフランスが誇る新幹線TGVに乗り、トゥールへ向いました。市街地を走る日本の新幹線と違い、何の障害もない広い田園を走るTGVは私達にすばらしい緑の風景を満喫させてくれます。

トゥール市役所では、国際交流担当助役バイヨー女史による都市模型図を使っの説明があり、つづいて彫刻やブロンズ像の美しい旧庁舎の一室でワインとチョコレート・クッキーの歓迎を受けるというフランス風の粋な計らいに一同感激しました。バイヨー助役は



トゥール市役所にて

一昨年11月に高松市制百周年記念行事へのトゥール市代表団の団長として高松市を訪問され、その美貌と明晰さで高松市民を魅了した人でもあります。

トゥーレーヌフランス語学院ではアダム女史がにこやかに迎えてくださり、スライドなどで学院の説明を受けました。また、昨春3か月間高松市国際交流協会がこの学院へ派遣した笠居佐都美さんの担当だったホルタン女史にお会いし、親しくお礼を申しあげる機会を得ることができました。

トゥーレーヌ甲南学園の校長は、かの有名な柔道の猪熊真氏です。昨春高松市長のメッセージを携えて入学した高松からの留学生、岩崎さんと望月君も同席して日本茶とおかきをいただきながら学園設立等についての説明を受けました。猪熊校長の人柄と柔道も取り入れた教育に対する情熱に私達団員は深く感銘しました。

ヴヴレ地区のワインカーブ「アリアス」はヴヴレ市長所有のもので、瓶詰した



ワインを年代ごとに分けて洞くつに寝かせて保存しています。昨年5月高松市長を団長とする代表団がトゥール市を訪問した際、招待されたワイン洗礼式の司祭長がヴヴレ市長アリアス氏でした。私達は、端正な容姿とシックなスーツの彼が自ら注いでくださるワインの芳香を楽しみながら、ワイン醸造法や何代も前から掘りつづけているカーブについてのお話に耳を傾けました。

トゥーレーヌ仏日協会では、会長ツウルパン女史をはじめ約60人の会員の方達が私達一行の為にトゥール地方のめずらしい民族舞踊を見せてくださったばかりか、ワインレセプションだけの最初の予定をディナーパーティに変更しての大歓迎に団員一同大感激でした。各テーブルに仏日協会会員と私達が交互に座り、日本語、フランス語そしてジェスチャーで話に花を咲かせ、大いに交流を図り、なごやかで充実した夕べとなりました。

トゥールで、女性が美しくしなやかに各方面で活躍しているのは同性としてたのもしく思いました。バイヨー助役、アダム女史、福祉センター所長デュボン女史、コロール人形アトリエのダビッド女史そしてツウルパン会長など私達がお会いしたこの方達は皆一様に輝いてみえました。そして日本女性もトゥールでフランス女性と肩を並べて活躍しているのは本当にうれしい。その一人がトゥールで私達代表団のために通訳だけでなく、助言や相談にもものってくださいだったクレオラ・ミキさんです。私は団員の方達と共に彼女に心からのお礼と大きな拍手を送りたいと思います。

トゥールでは連日公式行事がつづき、団員の皆様にはお疲れになったこととは思いますが、トゥールの文化・産業・福祉等大まかではありますが理解でき、またトゥール市民の方達との親善交流も図ることが出来たことは大きな収穫であったと思います。

今回の親善使節訪問がこのように意義深いものになりましたのは団員皆様と関係各位の御指導と御協力の賜ものと事務局一同深く感謝し、心からお礼を申し上げます。